「あのちょっと
お話があるんですけど」
一色いろは
生徒会長であり
奉仕部に出入りして
いる女の子だ。

「さ…最近雪乃先輩や
結衣先輩とやたら
親しいですよね…？」
「一体どんな
関係ですか…？」
いろはは真剣なまなざしで
こちらをにらみつけてきた。

「なんでそんなことを訊くんだ…？」
「そんなの決まってるじゃないですか…」
いろはは俺の返事を聞かずしゃがみこんだ。

「チンポに訊くんですよ♥」
いろははもうすでに俺の催眠にはまっていた。
はむ♡

「それでは雪乃先輩や結衣先輩と
どういう関係なのか
実検させてもらいますね♥」

「ああ遠慮なく
味わってくれ」

ぴくん

ぢゅる
ぢゅる

いろはは
ためらわず
舌で愛撫してきた。

「はむ…れる…ぢゅう♥やたらくっさいチンポですね♥」

「これだけ臭うってことは使ってないってことだしもしかしたら白かも…」

ちゅるちゅる

むわ…♥

ふー♥

ふー♥

「いろはちゃん
フェラチオじゃなくても
もっと別の方法で良かったんじゃ
ないの？」

「何いってるんですか
男性の本音は精液に
あるんですよ♥
しらないんですか？」

ハァハァ

ハァハァ

[redacted]

ハァ

いろはへの催眠は
どんどん強まり、
深みに落ちていく。

「いいからさっさと射精してください♥溜めてるんでしょ♥♥」
ずぽ♥ずぽ♥
「そこまでいうならいろはちゃんちゃんと俺の精液受け止めてね」
ずゅるる♥
ずぽ♥

「射精すぞっ!!」
ビクンっ
どんどん♥
どぷどぷ♥
びゅるるる♥
どぴゅっ♥びゅく♥
びゅるんっ♥
どぷどぷどぷん♥♥

「どういろはちゃん俺と奉仕部との関係がわかった？」

「うぅ…まだフェラだけではわかりませんね…♥これはもっと調べる必要がありそうです♥」

ビュ～ビュ～

ビュ～

ドピュッ

hhhhh

いつものヤリ部屋へと
いろはを連れ込み、
まぐわう。
処女喪失の痛みを
そのまま快楽に
催眠アプリで変換してやった。

「どうしたのいろはちゃんやけに反応が渋いけど」

ぶっ!!

ふっ♡

ふっ♡

「思ってたよりもあなたのチンポが大きくてですね…♥」

ぐぷ

ぐぷ

ぐぷ

ぐぷ

ぐぷ

「もっとちゃんと
根元までいかないと」
ビシッ
ビシッ
「チンポのことは
わからないよ！」
「ちょっと待って…♥
待ってください♥」
はっ♥
やっ♥
ぐちゅ
ぐちゅ
ずちゅ♥
ずちゅ♥
[redacted]

「奥に行ってるのわかる？いろはちゃん？」

ビクッ

ビクッ

はっ♡

はっ♡

あっ♡

「やだ♥まってください♥こんなの知らない♥♥♥」

ぐちゅっ

ずちゅっ♡

ずちゅっ♡

[redacted]

ぐちゅ

ぐぽぽ
ぐぽ
ぐぽ
ぐぽ
ぐぽ
ぐぽ
ぐぽ
俺はいろはの
快楽度をあげてやる。
いのはから
あきらかに余裕がなくなった。

「あっ♥はっ♥やっ♥」
「とんじゃう♥とんじゃうからぁ♥」
「いろはちゃんの初めてのまんこ種付けいくよ！」
パーン！パパパ

はあ
ぶるぶる
ぶるぶるぶる
ビクッ
ビクビク
ビクン
ビクン
ビクン

「種付けイキの反応が初々しくていいね」
はー！
はー！
はー！
「はあっ…♥あっ……♥温かいのまだ射精てる…♥」
放心したいろはを俺のものにすべく腰をしっかりつかんだ。

「えっ……♥」
俺は
催眠アプリの
リミッターを
解除した…！

「あぐっ♥うぅっ♥
なに……これ……♥♥♥」
ぶるぶる
ぐぐっ
おそそ
めりっ
くぱっ
くぱっ
いろはの身体に
体験したことのない
快楽が駆け巡る

とめどない快楽が
いろはの脳へと至る。
「これが
本当のセックスだっ！」
「あがっ♥
はっ♥苦しい♥」
ガクッ
ガクッ
あッ
はっ
あッ
ずん
ずん
ずん
ずん
ぐぽぽ

「あっ♥やば♥これ深いっ♥♥♥」
「それじゃあラストスパートいくぞっ！」
ガクッ
ガクッ
はっ♡
はっ♡
はっ♡
ずん
ずん
ずん
ずん

『いろはちゃんって
結構野太いオホ声だねw』

「オラっ!!
マジイキさせてやるぞ
いろはっ!
天国に連れてってやるからなっ!!」
「イグゥっ♥イグっ♥
イグイグゥッ♥♥♥♥
あぁ♥あぁあぁあぁあぁ♥
ぶっ
ぶっ

容赦ない射精が少女の膣にうちつけられる。

ビク

「あっ…ふぅ…
こんなに射精したの
久々かも」

「やっぱり
初物まんこは
最高だな…」

ビク

ドアが開く。

雪乃「……！貴方一体何を……！」

結衣「いるはちゃん」

二人は驚愕した表情でこちらを凝視していた。

『4人で乱交するぞ
さっさと服を脱げ…！』
ビクッ
ビクッ
『はいはいー』
ぴゅ
ぴゅ
終